



—中嶋 嶺雄—

今朝は私もよく買物に行くスーパーマーケット「ラルフス(Ralph's)」の別のチェーン店の脇で一人が撃ち殺されたといつて、犯人が現場に残した拳銃がTVに映っていた。

アメリカでは、ポスニア・ヘルツェゴヴィナの憎悪と怨恨に充ちた民族間の殺戮合戦の様子が毎日報じられている。ところがそのアメリカ社会には、クリントン政権になっても経済が一向に改善されないためか、このころ犯罪が急増している。私が住むサンディエゴは、アメリカでも最も治安の良い都市だといわれているが、今日も大学院の研究室に出してみると、コンピュータを盗む犯罪が相次いでいるので、研究室と廊下の双方の鍵を絶対に掛け忘れないようにとの通達が入っていた。

一連の犯罪のなかで最近目立つのは、銃による殺人である。昨夜もカリフォルニア中部のフレソノのクラブで七人が撃ち殺された、とCNNのヘッドライン・ニュースが伝えていたばかりなの

に、今朝は私もよく買物に行くスーパーマーケット「ラルフス(Ralph's)」の別のチェーン店の脇で一人が撃ち殺されたといつて、犯人が現場に残した拳銃がTVに映っていた。

同情が現地では高まっているという。裁判での法律上の争点は、被告の射殺行為が刑法違反かどうかであるが、レイシアン州の市民たちは、自分の家庭の安全が脅かされると思った場合、それを銃で守るのは当然だという感情論に大きく傾いて来ているという。ということになると、父親の服部氏が剛丈君の悲しい死を無駄にしてほしくないという痛烈な心情において呼び掛けた、アメリカ社会から



### 拳銃社会のディレンマ

一緒に、サンディエゴの東方約七〇マイルのナシヨナル・フォレスト(国定森林)の一角へピクニックに行っただとき、私の恩師でもある有名な政治学者のK先生は、アメリカでは銃で身の安全を守るのは当然のことだよ、と平然と語っていた。この事件に大きな衝撃を受けていた私は、そのときのK先生の言葉には強い抵抗を感じ、とつてい納得することができなかった。私事にはわたって恐縮だが、我が家の四人

の子供たちも全員AFSの留学生として高校生時代にアメリカへ行ってたので、この事件が他人事ではなかったからである。しかし、アメリカ社会に身を置いて眺めていると、客観的事実として、K先生の見方がやはり正しいように思われる。

先週の日曜日、私は大学で日本語の指導をしている日系婦人のお誘いで、日本の企業や官庁から派遣されて来ている大学院生たちと一緒に、サンディエゴの東方約七〇マイルのナシヨナル・フォレスト(国定森林)の一角へピクニックに行っただとき、私の恩師でもある有名な政治学者のK先生は、アメリカでは銃で身の安全を守るのは当然のことだよ、と平然と語っていた。この事件に大きな衝撃を受けていた私は、そのときのK先生の言葉には強い抵抗を感じ、とつてい納得することができなかった。私事にはわたって恐縮だが、我が家の四人

よう、と言つのである。若者たちは即座に同意して喜んでしたが、私はどういそん気分になれない。相手はまったくの好意で私たちを案内したいと思っっているのだから、たとえ遊びであっても実弾入りの銃を撃つという行為への私の強い拒絶反応はないは不快感を表明すれば、座が白けてしまふばかりか相手に失礼になる。何か理由をもうけて一行ここで別れて自分だけ帰ればよいのだが、自分の車は大学へ置いてカー・プール(三、四人ずつの相乗り)で来ているので、そんなわけにもゆかない。やむを得ず一緒に行って少し離れて見ていたのだが、私は一刻も早くそんな場所から立ち去りたかった。その夫婦は以前テキサス州に住んでいて、親しい友人が引越すとき、最も良い品物をといて拳銃をプレゼントしてくれたのだという。それ以来、拳銃がやみつきになったといつて、その日も数丁の拳銃を車に積んでいた。カリフォルニアでは登録が必要で、実弾をつめた

のホテルで外交問題の研究会に出た。食事のあいだの話題になったとき、私の恩師でもある有名な政治学者のK先生は、アメリカでは銃で身の安全を守るのは当然のことだよ、と平然と語っていた。この事件に大きな衝撃を受けていた私は、そのときのK先生の言葉には強い抵抗を感じ、とつてい納得することができなかった。私事にはわたって恐縮だが、我が家の四人

先週の日曜日、私は大学で日本語の指導をしている日系婦人のお誘いで、日本の企業や官庁から派遣されて来ている大学院生たちと一緒に、サンディエゴの東方約七〇マイルのナシヨナル・フォレスト(国定森林)の一角へピクニックに行っただとき、私の恩師でもある有名な政治学者のK先生は、アメリカでは銃で身の安全を守るのは当然のことだよ、と平然と語っていた。この事件に大きな衝撃を受けていた私は、そのときのK先生の言葉には強い抵抗を感じ、とつてい納得することができなかった。私事にはわたって恐縮だが、我が家の四人

先週の日曜日、私は大学で日本語の指導をしている日系婦人のお誘いで、日本の企業や官庁から派遣されて来ている大学院生たちと一緒に、サンディエゴの東方約七〇マイルのナシヨナル・フォレスト(国定森林)の一角へピクニックに行っただとき、私の恩師でもある有名な政治学者のK先生は、アメリカでは銃で身の安全を守るのは当然のことだよ、と平然と語っていた。この事件に大きな衝撃を受けていた私は、そのときのK先生の言葉には強い抵抗を感じ、とつてい納得することができなかった。私事にはわたって恐縮だが、我が家の四人

東バトンルーシュ郡裁判所で開かれている服部剛丈君射殺事件の公判四日目の二十日、検察、弁護側の冒頭陳述があり、「正当防衛」をめぐる対立した。(カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院客員教授 松本市出身)